

平成23年 森プロ事業実績：飛騨高山・宝の森プロ

(平成24年3月末現在)

		H22年度		H23年度			5力年 計画
		計画	実績	計画	実績	達成率	
集約化(ha)		67	45	85	107	126%	
作業道(m)		3,600	398	6,200	5,455	88%	22年度繰り越し 事業を含む
間 伐 等	面積(ha)	20	8	45	32	71%	切り捨て間伐 を含む
	材積(m3)	1,500	748	4,000	2,516	63%	作業道支障木 を含む
備考							

H23年度利用間伐等における所有者への還元額

2,472 円/m3

施業集約化の状況

- 平瀬地区については、境界明確化事業がほぼ終了。堂殿地区も60%は終了した。明確化事業に伴う座談会や、作業路の線形説明座談会の時に、間伐についても同意をもらい、その後、現地調査による提案書を作成し、順次契約を進めている。ほぼ当初計画通りに集約化は進んでいる。

施業プランの活用状況

- 施業プランを提示して、還元予定額を明示することで、所有者の信頼を得ることが出来、スムーズな事業実行につながっている。現在のところ、施業プランを提示した契約率は100%である。

施業プランナーの養成状況

- プランナー研修等に参加するとともに、研修内容やプラン作成ノウハウを水平展開して、森林整備部門すべての職員がプランナーになれるように進めている。



堂殿地区座談会の様子

作業道の状況

- 作業道の作設に対する考え方は、22年度実績に記したことと変わりはない。
- 23年度は、ブレーカーとバケットの交換をスムーズにするためのクイックヒッチと、破碎した岩のこまめな移動に運搬車を常備した。
- 23年度の施業地でも、作業道の路盤材として使える土砂が多くるので、施業地内で使用することはもちろん、すぐ近くの作業道の補修を同時に行い、そこで使用したり、来年度からも補修で大量の路盤材が必要になると予測されるので、そのためにストックしている。
- 22年度事業では、施工業者との打合せ不足から、こちらの考えていた線形から大きくずれて施工された箇所が発生したため、施工業者、特に現場の重機オペと常に連絡を取るよう心がけた。
- 23年度の施業地では、沢を渡る箇所が多く、県の指導も受けながら、慎重に施工した。沢の形状から洗越しよりも、管の付設によらざるを得ない箇所がほとんどで、呑口には、練石積みを行った。このときの資材として、現地で発生した大きめの石を使用し、必要なことを行いながらも、手間と費用を抑える工夫をした。



作業システムの状況

H23 木材生産性(作業道支障木は除く)

3.4 m³/人・日

同じく団地外での結果

3.5 m³/人・日

- ・(パルプ材) 伐倒(チェーンソー)→集材(グラブブル0.45/スイングヤーダ0.45)→造材(プロセッサ0.45)→搬出(6tフォワーダ)→25tトラック
 - ・(用材) 伐倒(チェーンソー)→集材(グラブブル0.45/スイングヤーダ0.45)→造材(プロセッサ0.45)→4tダンプに積み込み→中間土場へ
- ・新規チームが、スイングヤーダをうまく使えていない。長い距離を引っ張るところでも、単動ウインチ付きグラブブルのみで集材しようとして、全体の生産性を著しく落としている。



4WD 4tダンプへの積み込み



スイングヤーダ作業状況

森プロの成果

森林組合と森林組合員との関係

- ・契約等を通じて、個別に訪問する機会が増え、より深いつながりを築くことが出来ている。

森林組合と木材生産について

- ・搬出間伐を中心とした事業が進む中で、雇用形態の改革の必要性が見えてくるなど、組合全体の改革の起爆剤となりつつある。
- また、搬出間伐の事業地を多く確保していることで、自社工場の自組材安定確保への道が見えてきた。その上、自力販売にむけた特種材の注文にも、多くの事業地を確保していることと、中間土場の担当者を通じた現場への連絡体制により、対応できるようになった。

急傾斜地における事業実行について

- ・急傾斜で、作業道がなかったために放置されていた人工林の間伐を行うことができ、将来の全面的な皆伐を避けるような施業にむけた第一歩を踏み出した。

既設作業路の弱点の洗い出しと、改良について

- ・初めて本格的な木材搬出を行った結果、これまで見えてこなかった路盤の弱いところが顕在化し、改良を行うことが出来た。

研修や視察の受け入れについて

- ・各地からの研修や視察を受け入れ、失敗も含め見てもらうことで、地域の森林整備に貢献できたとともに、自らの研鑽にもつながった。

JV構成員について

- ・愛宝産業(有)については、国有林での事業が終了後、冬期間は森プロ団地内で作業を行ってもらっている。

今後の課題

- ・急傾斜地での作業道開設と、搬出間伐は行うことが出来たが、あくまで現段階は「出来た」だけのことで、機械や、作業システムが、最適で、効率よくできたとはとてもいえない。
- 新規の直営林産班、林業事業体ともに木材生産性は低い。現段階では、小さな、でもたくさんある無駄を一つずつ潰していくことを続けたい。
- ・既設作業道の改良が新たな作業道の開設と同じくらい重要なことがわかってきたので、新規の開設と違い、費用の出所が少ない中で手法の確立が課題である。
 - ・22年度の課題でもあったプランナーとしての手法の水平展開といった取り組みは、元林産課職員の各支所への振り分けで少しは進んだとはいえ、まだまだ不足している。
- 一部の職員だけが進めて、他の職員は造林のみといった従来の構図は大きく変わってないので、引き続きの課題として残っている。